優秀賞 高校生部門〈自然災害〉

岩手県立大船渡高等学校 2年
戸羽 葉

人の脆さと強さ

『人』って案外脆くて、でも強いものだなあ」震災を乗り越えた私はこう思う。

二〇一一年三月十一日午後二時四六分、東日本大震災発生。当時小学五年生だった私は、人の生死というものをまだ何も知らなかった。本震が収まった後、学校に迎えに来てくれた祖父の車で家に帰ろうとした。いつもの通学路である国道四五号線に出ようとしたとき、車の外から「津波が来るから引き返せ」と言われ高台に向かった。そして低地を見下ろせる場所に着いたときには、辺り一面黒い海と流された材木などでいっぱいだった。大津波警報が発令されても引き返せと言われても大丈夫だろうと呑気だった私は、このとき初めて自分が死の危険に晒されていたことに気づき戦慄した。死が身近にあると感じたのは初めてだった。

その夜は、まだ合流できない父母と兄を待ちながら公民館に泊まった。おにぎりを一つ食べ、一つの毛布を三人で一緒に使い、眠った。普段なら考えられない生活環境だが、あのときは「生きる」ことが最優先だった。

それから何日か経って避難所に移った。依然として自由な暮らしではなかったが、震災の日の夜を考えたら不慣れ、不自由な環境でも暮らしていける、人はこんなことで死んだりしないと思えるようになった。しかし一ヶ月以上に及ぶ避難所生活の中で、当然の事ながら多くの訃報を耳にした。中でも父の訃報には気がおかしくなりそうだった。何故私は生きているのかと葛藤したり、自分を責めたりもした。忘れられない、辛く苦しい経験だった。

しかし、それでも今、私は生きている。震災を通して「死」に触れ、人は脆いものだと感じたが、だからこそ尊いものだと思う。私一人では生きていられない、人は支え合うことによって強くなれるのだと実感した。生き抜くための力、それは支え合うこと。私はこれからも強く生きていきたい。